
触れ合い

美鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

触れ合い

【Nコード】

N1145U

【作者名】

美鈴

【あらすじ】

小説家の神谷隆史（36）とその小説家の本をこよなく愛する女子大生の嶋田伊織（19）の、ほんわかのんびりな年の差恋愛模様。

その家は、まるで時代の流れに取り残されたように思わせる古い家だった。

古き良き時代を彷彿とさせるその家を見ていると、私の大好きな小説の中にも入ったような感じにしてくれる。

私の大好きな小説というのは、神谷隆史先生が書いた純愛物語。

時代は大正など一昔の日本を舞台にするのが多く、その独特さに惹かれるファンが多い今注目されている小説家。

まさにその人が書いた小説にピッタリの家だったから、私は時間を忘れて見とれていた。

そこに、貴方がいるなんて知らずに…。

「そこで見るより、此方で見てもどうかかな？お嬢さん」

台所でお茶を用意するためにお湯を沸かす。

彼は少し濃いめの味が好きだから茶葉を多めに入れ、沸騰してからお湯を注ぐ。

ちゃんと味が出ているのか少し飲んで確認。

「ん、大丈夫ね」

お盆に湯飲みを置いて慎重に彼の元へと運ぶ。

部屋を仕切る襖の前についた私は、床にお盆を置いてから襖を開けようとする

「ご苦労様」

襖が勝手に開き、中から出てきたのは今まさに仕事で手が離せないはずの人。

「隆史さん！…お仕事は終わってたんですか？」

「いや。少し詰まっちゃってね。丁度伊織がお茶を用意している音がしたから中断したんだ」

「ふふ。じゃあ、二人でお茶にしましょう」

私は部屋に入り、インクの匂いが残る空気を味わいながら机に湯飲みを置く。

勿論、隆史さんの湯飲みだけだ。

仕事の合間のお茶だったから彼のお茶しか用意してはいなかった。

「今から茶菓子も持ってきてきますから、待っていて下さい」

再び台所に戻ろうとする私の手を繊細な手が掴む。

「隆史さん？」

彼になにかと聞いても答えることはなく、ただ握っていた手は私の指の隙間に絡めるように握り直す。

それからもう片方の手を私に差し伸べる。

「おいで」

ただ一言だけなのに、優しく囁かれたその声に惹かれるように私は彼の胸に埋まる。

隆史さんの使うインクの匂いやお香の香りが染み込ませられた着物に包まれ、心が落ち着く。

いつまでも、この香り、腕に、包まれていたいくらいに。

「少し…このまま」

「…ええ。いいですよ。私もまだこうしていたい」

二人思うことは同じだと解ると、隆史さんは一度私を抱き直し胡座をかいた自分の上に横抱きに乗せる。

私はそのまま彼の胸に頭を押し当てて落ち着く。

トクントクンと彼の胸から一定の音が聞こえてくる。

「私、隆史さんの腕の中が大好きです」

「何故？」

「隆史さんの香りに包まれて、とても落ち着くんです。その強い腕に抱かれていると愛されている感じがして……」

「感じ、ではないな」

「え……？」

「愛しているんだ。伊織」

「…嬉しい」

彼の本心に涙が出そうになったので、その胸に顔を隠す。

「伊織。顔を見せて」

「だ、駄目です。今は見せられません」

「伊織」

彼の声になんげも言われなかった私は、恐る恐る顔を上げる。

すると待っていたとばかりに顔に、今まで体を支えることに専念していた箸の両手が添えられ固定された。

「顔が真っ赤だ」

「そうです。だから見られなくなかったのに…」

「瞳に涙まで溜めて…。本当に愛しいな」

隆史さんはそう言うと、親指で私の目を優しく撫でてから額に頬に、次々にキスをしていく。

「隆史さん…」

「伊織…」

期待するような目を向けると、彼は優しい笑顔を向けてから唇にキスをする。

最初は啄むように、そして味わうように濃厚になる…。

徐々に熱を帯びていく体に逆らうことなく本能のままに求め合つ。

互いの唇が離れると、名残惜しむように銀色の糸がひく。

それが切れるのが合図だったかのように、私をそつと畳の上を下ろし、覆い被さる隆史さん。

「あ、待って…。そんな、今は…」

「仕事よりも、今の伊織が欲しい。今の君は今しか愛せないからな」

「…あ、もう…。後でちゃんと仕事して、くださいよ…」

「ああ。約束する。だからもう黙りなさい」

彼の手が服の中にあるのを感じてから、全てを彼に委ねることにした。

愛し合った後、布団に二人でくるまっている間も隆史さんは私を抱き締めて時々頭を撫でてくる。

「体は平気か？」

「大丈夫です…。ただ、まだ慣れないだけで…」

「伊織と出会ってまだ半年か…。もう何年も連れ添っている感じがするのは何故だろう」

そう。

まだ彼と出会って半年。

その半年の間に彼と出会い、惹かれ合い、恋人になり、小説家である彼の補助をしたくて、居候という形で身の回りの世話をするようになった。

「隆史さん」

「ん？」

「私はこれからも、隆史さんの傍に居られますか？」

「質問するのか」

「…私は、ずっといたいです。この腕の中に、あなたの隣に…」

「その願い、僕と一緒にだ」

「え？」

「二人で叶えようか。…まずは、君にプロポーズでもしようか」

「隆史さん…」

私達は布団から出て向かい合わせに座り、手と手を合わせて見つめ合う。

「伊織。僕と添い遂げて頂けないだろうか」

「…はい！私で良ければ、お願いします」

まるで彼の小説に出てくるような告白に、涙が出てくるのが分かった。

私は、とても幸せ者です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1145u/>

触れ合い

2011年6月19日23時47分発行